

# 学士課程全体を視野に入れた 2 年次教育のあり方について Second-year Experience in a four-year bachelor program

石毛 弓 (Yumi Ishige)

CELL 教育研究所研究員 (CELL Research Center for Educational Development)

現在、初年次教育の必要性は多くの大学で認識されている。では、次の学年である 2 年次においてどのような教育がなされるべきか。大学教育のベースとなる知識やスキルの習得を、果たして初年次だけで終えてしまってよいのか否か。本論はこの疑問について、2009 年度から大手前大学が実施している 2 年次必修科目を実践を基に答えてゆくものである。初年次教育との連携を図りつつ、社会人基礎力の育成を念頭においた 2 年次必修科目の取り組みを通して、専門科目を教えない必修科目の必要性とそのあり方を考察する。

キーワード：初年次教育, 2 年次教育, 社会人基礎力, 必修科目, コミュニケーション能力

## 1. はじめに

現在、大手前大学生では必修科目として 6 科目を設定している (2009 年度)。その内訳は、初年次に 4 科目、2 年次と 3 年次にそれぞれ 1 科目である。1 年次の場合、この必修科目は初年次教育の一環として行われている。また 3 年次の内容は、各担当教員の専門教育を行うゼミナールである。このなかにあつて、2 年次の必修科目としてなにを教えることが適切なのか、そもそも必修科目は必要なのかを問われてしるべきである<sup>(1)</sup>。本論は、初年次教育をより発展させるものとして 2 年次必修科目を設定した 2009 年度春学期の実践報告である。

本稿の筆者は、2 年生必修科目「基礎演習」にコーディネーターとしてかかわっている。各必修科目にはそれぞれコーディネーターが配置され、カリキュラムの統一や科目の円満な運営等に力を注いでいる。このコーディネーターが、該当科目の情報をもっとも総括できる立場にある。ゆえにこの視点から担当学年の状態を把握し報告することは、よりよい学習支援・学生支援のために有効である。上記の理由により、本論では今年度の 2008 年度入学生 (現在の 2 年生) の現状を、基礎演習を通して分析する。あわせて、2 年次必修科目における今後の課題点を明確にすることをめざす。

本論の大きな流れは以下のとおりである。まず最初に、基礎演習での取り組みを紹介する。これには科目の理念やプログラム内容などが含まれる。次に初年次教育と 2 年次教育の関係について述べ、その後 08 年度生の状況を分析する。最後に全体を振り返り、学士課程全体を通じた 2 年次教育のあり方について考察をする。

## 2. 「基礎演習」について

### 2.1. 基本理念

本学では、リベラルアーツ型教育を教育理念に掲

げている。この理念は、「自分で創る専門性」と「社会人基礎力」の二本柱で支えられている。基礎演習は、2 年生を対象とした唯一の必修科目である。ゆえにこの科目では、大手前大学が学生に獲得させたいと望む力をダイレクトに培う授業内容が組まれるべきである。

教育理念のひとつである専門教育は、ユニット (後述) や個別の科目で学生の興味に応じて教えられるべきものである。そうであれば、必修科目である基礎演習では、本学のもうひとつの理念である、社会のなかでよりよく生きる力を育てる役割を担うべきであろう。以上の理由により、今年度の 2 年次基礎演習では、社会人基礎力の育成をプログラムの目標として設定した。

### 2.2. クラス構成やプログラム内容

基礎演習の基本構成については、表 1 の通りである。春学期の到達目標は、「グループでテーマについてディスカッションをしたり、プレゼンテーションをすることができるようになる」である。現代の若者は総じてコミュニケーション能力が不足しているといわれており、本学の学生もその例に漏れない。ゆえに、まずその部分を補うためのプログラムを実施した。

春学期授業の主な流れは 2 つあり、ひとつは「インタビュー」、もうひとつは「グループによるディスカッション」であった。

インタビューでは、学生は 5、6 名のグループをつくり、約一か月の期間中に、課外活動として行った (受け入れ先部署数は 12)。主な質問内容は、その部署の業務についてである。

授業では、アポイントメントのとり方や敬語、質問項目の作成などを指導。またインタビュー後に、グループごとに内容をパワーポイントにまとめて、クラス内で 5 分程度のプレゼンテーションを行った。

表1 基礎演習の基本構成

授業回数	春学期 15 回、秋学期 15 回
クラス人数	1 クラス 35 名前後
曜日・時限	月・火・水・木・金の 5 時限目 (4~5 クラス/曜日)
実施方法	35 名程度の「個別教室」と、その 曜日の全クラスを集めた「全体教 室」(120~180 名程度)を設置。授 業内容によって使い分ける
コーディネーター業務	統一の授業プログラムの策定や課 題の作成、成績評価基準の設定な ど、科目の運営全般を担当

ディスカッションもまた5、6名のグループで実施した(インタビューとおなじメンバー)。グループのメンバーは、学期を通じて基本的に同じ構成とした。グループごとにひとつのテーマを選び、それを何度かの授業で継続してディスカッションするという形式をとった。この過程で、調べ学習などの課題も実施した。また学期の終わりに、グループでプレゼンテーションを行った(パワーポイントを使用。所要時間は質疑応答を入れて10分程度)。

プレゼンテーション時には、学生に評価シートを配布し、各グループのプレゼンテーションを評価させた(インタビュー、ディスカッション共)。ディスカッションでのプレゼンテーションでは、この評価シートと教員による評価を基にクラスの1位を決定。1位となったグループは、次週に大教室(4、5クラス合同授業)でクラス代表としておなじプレゼンテーションを行った。

### 2.3. グループワーク導入の利点と反省点

春学期は、以上のようにグループワークを中心に授業を展開した。その利点と反省点について述べる。

まず利点だが、学期を通じてグループ内でディスカッションをし、また人前で話すことが求められたせいで、クラス内で意見を交換したり発表することへの抵抗感は減少したと考えられる(確認くんブログ(後述)や学期末アンケートにおける自由記述欄の結果による。次の「達成感」についても同様)。

さらに「インタビューに行く」、「グループで話し合い論点をまとめる」、「発表をする」などの目標設定により、学生は一定の達成感を得ることができた。本学の学生の傾向に、成功体験の少なさを挙げることができる。物事に真剣に取り組み、それを成し遂げた経験が乏しい学生が多いのである。春学期のプログラムは、この点の改善を目指すものでもあった。

反省点の最大のもの、授業をまたいでの固定グループとしたため、やる気のあるグループとそうでないグループとの差が大きく出たことである。教員のファシリテーションによりやる気を持続できたグループもあるが、とくにメンバーが欠席しがちなグ

ループは、モチベーションが低下しがちであった。

継続した討論は、論理的思考能力やコミュニケーション能力を育成するうえで有効である。しかし、その実施方法にはさらなる工夫が求められることが、あらためてコーディネーターに示されたかたちとなった。

## 3. 初年次教育と2年次教育について

### 3.1. 初年次教育の役割

初年次教育は、高校から大学へのスムーズな移行を果たすために設定されるものである。近年、多くの大学が初年次教育を導入しているか、導入を試みている<sup>2)</sup>。つまり、その必要性が広く認識されている。だが、この分野でまだ目立つかたちで議論の俎上に上がっていないのが2年次教育である。しかしながら、初年次教育に力を入れるなら、次の学年はどうあるべきかもまた問われるべきであろう。

もし初年次教育を高大の接続のみととらえるなら、このカリキュラムはその名の通り初年次でその任を終えるものだろう。しかし大学教育の基礎づくりと考えるなら、初年次だけで足りるのかという問題提起がなされてしかるべきである。

本学では現在、初年次教育として「情報活用」、「英語表現」、「日本語表現」、「フレッシュマンセミナー(以下FSとする)」の4科目を設定している。科目間の連携や情報共有を通じて、初年次教育全体で学生をサポートする体制の構築を理念としている(詳しい内容は本論集の他論文を参照)。そしてこの初年次教育と連携するかたちで、2年次に必修科目をおいている。これが、初年次教育を初年次で終わらせてよいのかという問いへの、本学のひとつの答えである(2009年度)。そこで次の節から、初年次との連携における2年次科目という点から基礎演習の位置づけをみてゆきたい。

### 3.2. 初年次と2年次の連携

1年時に取得した学習内容を実践する場。ひとことで表せば、これが基礎演習が初年次教育との関係において担っている役割である。

たとえばインタビューの際には、日本語表現で学んだ話す力や敬語の使い方が生きてくる。パワーポイントは情報活用で既に学習していることが前提であり、授業内でソフトの使い方を教えることはなかった。調べ学習では英語表現のeラーニングで身についたPCスキルが役立ち、ディスカッションではFSでのグループワークの経験が活かされた。このように、前の学年では科目ごとに身につけていた力を総合的に発揮する場として、2年次基礎演習は位置づけられているのである。

このときとくに重要になるのが、FSとの連携である。FSはホームルーム的な役割をもつ科目であり、大学での生活に慣れること、またペアワークやグル

ープワーク等を通じて学生間の交流を図ることを目標としている(2009年度)。このFSで、2年次を見越したコミュニケーション能力の基礎を育ててゆけば、次の学年ではその発展から始めることができる。このFSと基礎演習で習得した力はまた、3年次の就職活動への準備となり、卒業後に社会に出た際の実践力につながってゆく。2008年度の開始時には、基礎演習という科目の開講が決定していなかったため、FSとの連動が確立してはいなかった。しかし今年度のFSと基礎演習は、このリンクを念頭においたカリキュラムづくりを行っている。

必修科目は、学年によって果たすべき役割が異なる。初年次においてそれは「大学生としてのルールの学習」であり、2年次は「コミュニケーション能力の育成」、3年次のゼミナールでは「専門性を高める」となる。また4年次は、専門性をさらに深める必修科目の設置が必要となるであろう。このように学士課程全体を見通したうえで、学年間で連携をとり柔軟にカリキュラムを組むことが、専門科目のみならず必修科目でも求められる。この前提があつてこそ、2年次に必修科目をおく必要性がみえてくるのである。

#### 4. 08 年度生の現状と課題

##### 4.1. おかれている状況

この数年間で、大手前大学は多くの新システムを取り入れている。そのため、学年ごとに状況が異なる場合がある。そこでまず、この過渡期において現在の08年度生がどんなポジションにおかれているのかを整理してみよう。

- ・「ユニット自由選択制」 3年目
- ・「初年次教育」 2年目
- ・「基礎演習」 1年目
- ・「確認くんブログ」 1年目

各項目について簡単に説明する。まず「ユニット自由選択制」は、学部・学科の枠を超えて学生が自由に授業を選択できるシステムである。学生は、強い連関のある4~5科目がセットになった「ユニット」単位で履修することで、自分のメジャーをつくり上げることが推奨されている。

「初年次教育」は、現行の2年生が昨年度における初の対象学生となる。また「基礎演習」も、現在のかたちで施行されるのはこの学年が初めてである。「確認くんブログ」(後述)は、今年度より始まった試みとなる。これらの点を踏まえた上で、次節ではその獲得を基礎演習の目標とした社会人基礎力についてみてゆきたい。

##### 4.2. 社会人基礎力(C-PLATS)の定義と育成

本学では、社会人基礎力を独自に「C-PLATS」と定義している。内容は表2の通りである。全学的に

は、シラバスにC、P、L、A、Tの項目が記され、すべての科目においてどの能力が習得できるかが明記されている。

C-PLATSの活用については、今年度から始まった取り組みであることから、初年次においては積極的な試みがなされている。それ以外の学年へのはたらかかけは弱い、2年次では基礎演習で「確認くんブログ」を利用し、C-PLATSの意識づけを行っている。

確認くんブログとは、本学独自のLMS(PC、携帯端末共に対応)に装備された機能のひとつであり、eポートフォリオのことである。学生は基礎演習の授業終了5分前になると、携帯電話からLMSにアクセスし、ブログに書き込むよう指導される。ブログ画面は「C、P、L、A、T、その他」の6項目に分かれており、学生はその授業中に自分が習得したこと、気づいたこと、またできなかったことなどを自由に記述する。この試みを通じて、学生は本学で身につけるよう期待されている社会人基礎力を認識し、その授業で自分が習得した力を振り返るのである。なお、今年度におけるC-PLATSの評価方法は、学生の自己評価としている。

##### 4.3. 成績について

学生の成績評価にGPA制度を導入している<sup>④</sup>。また、卒業年次にはGPAが1.5以上あることが目安となる。さて08年次生の成績をみると、通算GPAが1.5未満の学生は146名おり(2009年9月1日現在)、これは前年度の108名(2008年9月)と比較して高い数値となっている。この事態にいたった理由は複数考へるが、その大きな原因のひとつに担任の不在を挙げることができるだろう。

表2 C-PLATSの定義

Creativity(創造力)	既成概念に縛られず新しいものを生み出す力
Presentation(プレゼンテーション能力)	自分が伝えたい事を効果的に表現できる力
Logical Thinking(理論的思考力)	論理的にものごとを考える力
Artistic Sense(芸術的感覚)	美しいものを理解し、生み出す力
Teamwork(チームワーク)	人間関係を大切にしながら、主体的に行動する力
Self-control(自己コントロール力)	自分自身をコントロールする力

現在の1、2年生には厳密な意味での担任がない。しかし1年生に関しては、必修4科目および学生課・スクールカウンセラーなど学校全体で学生情報を共有し、早期の問題発見・解決に努めている。また教員では対応が困難な場合は、すみやかなスクールカウンセラーや心理カウンセラーへの橋渡しが行われている。この支援体制が構築されたのが本年度からであり、そのため現在の2年生は、元FSや現基礎演習の担当教員はいるものの、ケアという意味では手薄な状態にある。

とりわけ08年度生の成績に関しては、本学はユニット自由選択制のため履修の選択肢が多様であり、そういった面でのアドバイスが不足していたのではないかと考えられる。08年度生にたいしても、成績不振の学生には二者面談・三者面談を行い、また履修説明会を開くなどはたらきかけはなされている。しかし筆者がコーディネーターとして多くの成績不振学生に対応した経験から、日常的に個に即した対応が必要とされていることが感じられた。この点に関しては、現在改善に向けて実施している事項はいくつかあるが、その成果については来年度の結果を待って報告したい。

### 5. 今後の課題

必修科目からみた08年度生の春学期の状況を報告した。実際の授業内容からみたとき、よかった点はグループワークによるコミュニケーション能力の育成と、複数の到達目標を設定することによる自己肯定感の向上だった。改善点は、グループで継続したテーマをあつかうことへの工夫である。また必修科目という枠組みから見ると、必要とされることは初年次教育との連動によるより効果的なカリキュラムの作成である。

必修科目は、学生が自分自身で選んだのではないという点から、動機づけが弱くなるという難点がある。しかし、各学年における必修科目の役割を明確に設定し、なんのためにいまそれを学習しているのか、それがどう次の学年で役立つのかを明らかにすることで、学生の学習意欲を向上させることができるだろう。そしてこれが、学士課程全体をみすえた必修科目のあり方になるのではないだろうか。

卒業時に学生がどうあるべきかのヴィジョンを大学が設定できれば、4年間の各段階ごとに必要な教育がみえてくる。それを必修科目としてどう授業内容に反映してゆくかが、今後考えるべき課題となるのである。

### 謝辞

本論文は大手前大学における2009年度基礎演習での取り組みをまとめたものである。同科目にかかわられたすべての教職員に心からの謝意を表す。

### 参考文献

- (1) 石毛弓、奥田正信、本田直也 (2009) リメディアルとしての社会人基礎力. 日本リメディアル教育学会 第5回全国大会発表予稿集, 171-172頁。
- (2) 山田玲子 (2008) 初年次教育の組織的展開. 初年次教育学会誌第1巻第1号、66-67頁。
- (3) 日本の大学におけるGPA制度導入の割合については下記を参照。(文部科学省(2008) 2. 授業の質を高めるための具体的な取組状況<厳格な成績評価の実施>., [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/06/08061617.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617.htm))

### SUMMARY

The purpose of this paper is to examine the necessity of Second-year experience, which is not directly related to major subjects but teaches basic education at university. Today, the importance of First-year experience has been recognised by a number of universities. Then, it shall be the time for the discussion on whether Second-year experience is needed or not. According to this reason, I introduce the practice of Second-year experience at Otemae University in 2009. It is expected to be a contribution to the development of this new field.

**KEYWORDS:** FIRST-YEAR EXPERIENCE, SECOND-YEAR EXPERIENCE, COMPULSORY SUBJECTS, SOFT SKILLS, COMMUNICATION SKILLS